
吾輩の空

彼音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吾輩の空

【Nコード】

N6343B

【作者名】

彼音

【あらすじ】

吾輩にとっての幸せとは何か。追求する事によって変なものまで見えてくる。重要なのは結末じゃない。

（前書き）

難しく考えずに読んでほしいです。

「夢は連続して繰り返される。水滴がポタッと落ちる時間の半分の半分の半分の…本当に一瞬のできごと。一生とはそんなもんだ。」

……………吾輩の空……………？

始まるよ。

それは二〇〇七年の春のことであつた。

寒く辛い冬の季節を終え、吾輩にも春がきた。四月に入ってからというものの気温が急に高くなり、吾輩は朝から汗まみれで起床することになった。

そつだそつだ、名前を言い忘れていたナ。

吾輩の名は浦和安（うらわやす）というのだ。無理に覚えておけとは言わないが、吾輩がこれから語る物語の主人公の名前なので、覚えていて損はないハズだ。

「安！鏡の前で何やってんの！今日から学校でしょ！」

何故に朝からこつも大声を出せるのやらと思わせる母親が、吾輩に学校指定の黒い鞆をドスツとつきつけた。

「吾輩は自己紹介の練習をしていたのだ。今日は高校のクラス替えの日だ。自己紹介で滑ってしまえば今年も友達ができないと思い吾輩はトテモ心配なのだ。」

鏡にうつっているのは、身長がやや低く黒髪をワックスでツンツンと立たせた老け顔の青年であつた。

吾輩は何故こんなに老け顔になってしまったのだろうか。そんな事を考えつつ鏡の中の自分とニラメッコをし、制服の襟を正してから家を出た。

「それでは高校へ行ってくる。」

吾輩はボロくて小さな木造二階建ての我が家を背に、玄関に停めてある愛車のセンチユリー（普通の安い自転車）に跨って、高校へと向かった。

吾輩は雲ひとつない青空を見上げて考えた。吾輩は友達運というものに見放されて今まで過ごしてきた。ちなみに今日から高校二年生なのだ。今年の七月で十七歳になる。つい昨日までは小学生だったのになと思ってみたりする高校二年生初日の吾輩。今年こそ絶対に友達とやらを見つけてみせようではないか。

…そういえば去年も一昨年もその前もその前の前も、初日の日に吾輩は同じことを考えていた。しかし友達と呼べる人と出会うことは一度もなかった。

そうだ。去年もこの澄み切った青空の中で輝く太陽が吾輩を照らしていた。この太陽に照らされた時、吾輩はいつも思ってしまうのだ。初日の快晴というトテモ清々しいスタートは吾輩を応援してくれているのだと。

そして吾輩は自転車で十五分ほどペダルをこぎ続け、高校に到着した。

やけに狭い門も一年も通えばスツカリ慣れてしまった。初めてこの門を見た一年前の今日、本当にここから入っていいものかと戸惑ったぐらいだ。とても高校とは思えないコジンマリとした小さな高校。吾輩は門を抜けてすぐにある駐輪場に愛車センチュリーをとめて、いつもより人の量と流れが多い下駄箱で窮屈に靴を履き替え、そして教室へと向かった。

吾輩は今年で二年生。一年生の教室は階段を上がり左側にある。二年生の教室は階段を上がり右側にある。

吾輩は階段を上がって、各教室の扉に張り出されたクラス替えの結果を見て、自分が二年三組になっていることを確認した。

あともう一つ確認したのは、吾輩が高校に入り一目惚れた元同じクラスの女子の上弓^{うえゆみ}さんが、今年も同じクラスにいたという嬉しいことだ。まあ一度も会話なぞした事はないが。

それから各自、指定された自分の席（出席番号順）に座って、色々なところから会話が聞こえる。

「おお！また同じクラスじゃん！」と左の席から。

「お前は一年の時に三組だったヤツ！」と窓際の席から。もちろん吾輩に声をかけてくる人など一人もない。

吾輩から声をかけようにも、そんな勇氣はない。

俺の左隣の席で笑顔を振りまいている明るい感じの男子生徒が目に入った。こんなに明るい人なら話しかけても笑って返事してくれそうだなと思ったのだが、吾輩にまた悪い癖が出てしまった。

吾輩は話しかけて失敗した時のことを想像してしまったのだ。

「吾輩は浦和という者だ。」と吾輩が声をかける。

するとい今まで笑って話をしていた男子生徒の笑顔が突然消失し

「ああ？お前誰だよ？ウゼエよ！」とか言われる場面が吾輩の脳内に浮かび上がったのだ。

本当に怖くなった。

吾輩は教室に入りスツカリ涼しくなったにも関わらず汗をかいてしまった。吾輩はこの明るいムードの教室の空気に耐えられなくなり、鞆の中から小説を取り出して読むことにした。

それから何分かが経過した。

荒々しいガラガラというドアの音と共に一人の教師らしき男が教室に入ってきた。

その教師は黒板の前に立ち、クラス名簿のような一冊のノートと口を開いてこう言った。

「どうも。僕が今日からこのクラスの担任になる島島しましまです。一年間よろしくな。」

吾輩、島島先生とは今日が初対面ではない。去年一年生に数学を教えていた教師だ。身長が高く筋肉質な身体に似合わず、囲碁部の顧問をしているらしい。

そして次に、島島先生の言葉が吾輩の心臓の動作速度を急上昇させることになった。

「それでは皆さん、自己紹介をしてもらいます。自分の名前と、あとは趣味とか特技とかも言ってください。」

クラスはシーンと一気に静まり返り、空気が冷たくなった。

そしてみんな緊張しているのか、空気は重くも感じられる。

そんな重い空気を切り裂くかのように島島先生が言う。

「では、出席番号一番の上弓さん。」

吾輩はその名前を聞いてドキっとした。出席番号順ということは、吾輩の名は浦和：吾輩の好きな上弓さんは前の席だ。

吾輩が心の中で喜んでいると、上弓さんの自己紹介が始まった。

「上弓です。趣味はオセロとデスメタルです。」

そうか、上弓さんはオセロとデスメタルが好きなのか。吾輩も実は好きなのだ。（赤面）

「では、次は二番の浦和君どうぞ。」

ついに吾輩の出番がやってきた。そうだ、この時のために今まで頑張ってきたのではないか。この時この瞬間に吾輩が発する言葉により今後の吾輩の高校生活が決まるのである。頑張るのだ吾輩よ。今こそ練習の成果を見せるのだ。吾輩にとって、これは発表会なのだ。影で練習に練習を積み重ね、眠れない春休みを終え、ついに吾輩の出番がやってきたのだ。さあ見たまえ世界の神々よ。吾輩は今日ここで立派に：その、一年遅れた高校デビューを果たすのだ。見るも不快な幼虫が成長して綺麗な蝶になるように吾輩も今日ここで羽化するのだ。さあ言うのだ吾輩よ！自分の名前と、特技がドラムだということをし！

吾輩は静かに立ち上がり、息を吸い込んだ。

「わ、わ、わ、吾輩は、吾輩の名は浦：うららわ：裏技であり趣味は浦和で、と、と、特技は、ド、ララ、ドレスでむる！」

吾輩は、なんて情けない男だ。

吾輩の自己紹介は最悪だった。失敗しても、それが笑いに変化して面白い人だという印象をまわりに持たせることもできる。

しかし吾輩の自己紹介に笑いは起こらず、みんなポカンと口を開いたまま黙り込んでしまった。吾輩はダメな人間だ。

その後みんなの自己紹介を聞くこうにも聞けず、吾輩は下を向いて地面と会話していた。

「吾輩は今年も一人なのか？」

地面は答えない。

「吾輩に青春は一生こないのか？」

地面は答えない。

そしてその後、校舎の四階にある体育館に集まり、校長の長く退屈なスピーチを聞かされて、教室へとまた戻った。

吾輩は自己紹介の失敗のせいで居心地が悪い。まるで金魚の水槽の中に入れられた一匹のメダカだ。早く家に帰りたい。家に帰って熱いほうじ茶を飲みながら弾幕系のシューティングゲームをやりたい。シミュレーションRPGでもいい。なんでもいい。なんでもいいから早くこの空間から脱出したい。

吾輩は汗まみれになりながら、チャイムが鳴るのを待った。

上弓さんは前の席で配られた新しい教科書に名前を書いている。

吾輩は家に帰ってゆっくり書こうと思い、強化書類を全て鞆の中に放り込んだ。

そして幸せの鐘と化した学校のチャイムがキンコンカンコンと鳴るのを確認した吾輩は、逃げるように鞆を持ち教室から出た。

吾輩は軽い絶望感を覚えた。もう慣れているから大丈夫だと思い込みたいたのだが、そうはさせてくれない。

吾輩は、すごい勢いで寂しいのである。

その日の学校の帰り、自分の家の前を素通りして一分ほど自転車で走れば見えてくる小さな公園に向かった。

この公園は吾輩よく来るのである。何か嫌なことがあると、いつもこの公園に吸い寄せられるように行き着いてしまう。

吾輩は公園内に誰もいないことを確認してから、ブランコのあるところまで行き、自転車から降りた。

足が地面についてしまう低いブランコに乗り、冷たい鎖を手で握り空を見た。

満開に咲いた桜が、何故か皮肉に感じられるのは、吾輩が情けない証拠である。

「ナア、ネコ君よ。人は何故こうも難しいのであろうか。」

目の前にいる茶トラの野良ネコに話しかけた。

「にゃん？」と返事をした。

「お前に言っても、この辛さは理解できないであろうな。」

ネコは吾輩をジッと見つめてから、毛繕いを始めた。

吾輩はしばらく考え事をしてから、家に戻った。

家の玄関で靴を脱ぎ脱ぎ、ほうじ茶を湯飲みに入れてから自分の部屋に戻る。

吾輩はゲームの電源をオンにして、コントローラーを握った。

紫色の弾幕で画面がいっぱいになったテレビを見て、どう敵弾を避ければいいのやらと考えたり、どう動けば高スコアを叩き出せるのかと考えたり。こうして別の事を考えている時は、吾輩本当に幸せを感じるのだ。吾輩は家でゲームしているのがお似合いなのかもしれないな。

こうして一日は終わった。

*

部屋の窓から入る太陽の光線が吾輩を刺激する。

もう朝か。吾輩またあの教室に行かなければならないのか。おまけに今日から六時間授業だ。

吾輩は軽い腹痛に襲われながら、食べる気にもなれない食事をして学校へ旅立つ準備をした。

吾輩は青空の下、自転車に乗り、昨日の失敗を思い出す。

学校行きたくない。帰りたい。心に傷をつけられたくない。

吾輩は小さい頃に大人に怒られたり怒鳴られたりした時の場面や怒鳴り声を今でも鮮明に覚えている。もうこれ以上、嫌な記憶を増やしたくはない。その一心で前に踏み出せないのである。

教室に座ると同時に鞆から小説を取り出して読み始める。前の席に座っている上弓さんを少しばかり気にしながら。

そして吾輩が本を読んでいると、一人の男子生徒が近づいてきて吾輩に声をかけてきた。

「えっと、裏技君だっけ？」

あまりにも唐突すぎて吾輩の思考回路は停止しかけた。

「あ、あ、い、いかにも吾輩は裏技という男だが。」

気の小さい俺は、自分の名前は浦和だと言う事ができなかった。

しかし、それは問題ない。

今、吾輩に友達ができようとしている。

からかわれているなどと思っではいけないぞ吾輩よ。

「俺は西村ってんだけど、裏技はゲームとかすんの？」

自らを西村と名のる、背が低く黒髪をピシっとさせた真面目そうというか現代でいうオタク系の彼は、笑顔で俺にゲームするのかと質問してきた。

吾輩は、どう対応していいのかわからない。

「ゲーム、ああ、ゲーム吾輩は大好きなり。」

セリフを噛みまくっている吾輩の返事を聞いて、その西村という男はまたもや口を開いた。

「どんなゲームすんの？RPGとか？」

「わ、吾輩はパズル系以外なら何でも好きでござるよ。」

西村という男は後ろを見て、仲間らしきまたもやオタク系の男をこちらに呼び寄せた。

「裏技、こいつは俺の友達の河内だ。」

吾輩は西村の横に立つ棒人間のような男の方を見た。

背が異様に高く百八十センチ以上はあるだろう。黒くて堅そうに群がる癖毛をボリボリと掻き乱し、吾輩に挨拶した。

「ども、河内っす。」

「ああ、吾輩は裏技だ。」

もう吾輩は勢いに任せて自ら裏技と名乗ってしまった。

そして、吾輩はこの後しばらくこの二人と会話を続けた。

なんだ簡単じゃないかと正直思った。友達を作るという事に対して怖いという概念を幼少期から持っていた吾輩は、思わず授業中にも関わらず薄く微笑んでしまった。

それから学校の帰り、吾輩は西村と河内に誘われた。

「おい裏技！一緒にゲーセンでも行こうぜ！」

吾輩は嬉しさのあまりに笑顔で返事をした。

話は今日の昼休みに戻る。いつものように吾輩は学校の駐車場にシートをひいて弁当を一人で食べていた。するとそこに西村と河内がやってきてた。

「おう、こんな所にいたのか！」

西村が弁当を片手に走り寄ってきた。その後ろからノソノソと歩いてくる長身は河内。

吾輩は西村達と一緒に弁当を食べた。誰かと一緒に弁当を食べるなんて吾輩、生まれて初めてなのである。

青空の下、微かに香る桜の匂いを鼻で感じながら三人で弁当を食べるなんて、吾輩は嬉しいのだ。

そして西村が言った。

「俺と河内は近所に住んでるだ。学校の前の駅から二駅ほど離れた駅で降りてすぐだよ。」

続いて河内が言った。

「裏技、お前はどこに住んでんだ？」

「吾輩はここから自転車で十五分ほどで我が家。」

「へえ、近いつていいなあ。」

という会話をした。

その記憶を思い出した俺は、一緒にゲーセンへ行くのに自転車を学校に置いたまま電車に乗り学校から最も近いゲーセンへと向かった。電車内で扉にもたれかかった西村が俺に言う。

「裏技、お前は好きな人とかいるのか？」

吾輩は驚いた。好きな人というものは簡単に人に教えていいものなのか。吾輩は赤い顔をしながら、今時の子は好きな人を教え合うものなんだと思い、上弓さんの名を口に出した。

「ああ上弓さんかあ。俺もあの子はいいと思うよ。」

西村はウツトリした顔で言う。

そこで河内が無表情で言った。

「でも上弓さんって、彼氏いるんじゃないのか？」

「馬鹿か！上弓さんに彼氏がいるワケねえよ！上弓さんは学校のアイドルだぜ？あんな可愛い女の子は他にいねえよ。」

吾輩は思った。やはり上弓さんは吾輩の好みというだけではなく、世間一般的に、万人受けする可愛い子なんだなと。それでは吾輩なんて論外だ。きっと男集に群がられる上弓さんと吾輩が…その…付き合うという行為をすれば、やはり世界の物理法則上で成り立たない反発というか…。

「おい裏技、どうしたんだ？」

西村の声で吾輩はアツと正気に戻った。

「西村よ、吾輩は今、何を考えていたのだろうか？」

「知らねえよ！」

そして駅に到着する。

人で賑わう駅前を歩いていると、世界中の人々に注目されているかのような錯覚に陥り、吾輩は顔が赤く染まってしまう。

制服姿でタバコを吸う不良少年達をボーッと眺めながら、吾輩達はゲーセンへと向かう。

暗くて狭い階段を上ると自動ドアがあり、その扉を開くとそこには天国が広がっている。カネさえあれば何時間だって遊べる青少年にとつての安らぎの場。

吾輩は自動販売機を背に向けて、シューティングゲームの台に五十円玉を投入した。その頃、西村達は奥の方に設置されたドラムのゲームに熱中していた。吾輩も一度プレイしようか。

そしてその後は何事もなく、一日は終わった。吾輩にとって初体験となる一日だった。緊張したり楽しかったり、爆笑とやらをしてみたりもした。ああ、明日は休日だ。ゆっくりしよう。

*

今日は休日。

吾輩、休日は何故か胸騒ぎがして早起きしてしまうのだ。

今日は吾輩大事な用事がある。それは思春期の男性諸君ならば経験したことがあると思う。これもまた緊張する任務なのだ。

吾輩は起き上がり服を着替えると、予め用意してあった真つ黒の紙袋を取り出した。この袋は前もって近所の服屋さんから調達してきていたのだ。吾輩なんて頭がいいのだろう。

吾輩は自分の部屋の押入れのカーテンを開いて中に手を入れ、押入れの中から「ごほんごほん」その「いやらしい雑誌」というものを取り出した。何？キモイだと？それを言われては吾輩も困るんだよナア。だがしかし恥じる事はないぞ男性諸君よ。性欲とは動物の生殖行為を求める欲のことなのだ。いやらしい本を見ているからと言って恥じることはない。人間を含む全ての動物は子孫を残すために必死なのだ。カマキリなんて交尾の後に雌に食われて

しまうというのに子孫を残すため生殖活動を行う。性欲は誰にだってあるのだ。異性の淫らな姿を見たいと思う吾輩は、そう、勝ち組なのだ。

ごほんごほん……。話が脱線してしまったようだ。それでは本題に戻ろうか。

吾輩は本日、その、いやらしい雑誌を捨てに行くのだ。

何？普通にゴミ箱に捨てるなりすればいいだと？ハハハ。諸君はそんな事できるのかね。少なくとも吾輩は母親に見られたくないのだよ。その、吾輩にもプライドというものがあって、そんな風に見られたくはないのだよ。だから今日はこの雑誌を誰にも見つからないように川原かどこかに捨てに行くのだ。

そして吾輩は雑誌を真つ黒の紙袋に入れて、親に見つからないように外へ出た。

自転車の前かごに袋ごと入れて、吾輩は自転車に跨った。

吾輩は自転車のペダルをこぎながら捨てる場所を考えた。その結果、吾輩の家から十分ほどで行くことができる大きな川に決定した。

もちろんこれは犯罪だ。ゴミを捨てるのは重罪で、人としても駄目だ。マナーは守らないといけない。しかし吾輩、今日だけは不良少

年の仲間入りをしようと腹をくくった。大丈夫だ。吾輩はタバコも吸わないし薬もやらない。悪い事なんか一つもしたことがない。今日ぐらいは神様だってお許しになるだろう。今日一度だけだ。

そう考えているうちに川原へと到着した。

川沿いにあるゴルフ場は休日のせいだ、けっこう人が多い。

気付かれないようにコソコソと吾輩はゴルフ場を横切る。

もう春なので花が咲き乱れて、草木も元気に生い茂っている。その草木達は河内のように背が高く、吾輩をスッポリと隠してくれる。

吾輩は大嫌いなカメムシを気にしつつ、なんとか川に出ることができた。現在時刻二時過ぎた頃。早く終わらせて帰ろう。

川原は砂利だらけになっていて、サンダルでできた吾輩は足がとても痛いのである。でも吾輩後悔なんてしないぞ。何故なら靴を履いてきたなら今頃この高い気温にやられて靴の中が蒸れて臭くなるからだ。こんな臭い足でもし大好きな上弓さんに出会ってみる。それこそ終わりだ。吾輩の人生に終止符を打つことになる。よし、ここでいいだろう。

吾輩は川原の深い茂みに向かって、雑誌を紙袋ごと全力投球しようとした。

吾輩は振りかぶり、きつと力み過ぎて物凄い顔をしていただろう。それに加えて吾輩は今まで慣れ親しんだこのイヤラシイ雑誌との別れを正面から受け止めなければならない。吾輩ピッチャーなのかキヤッチャーなのか、両方を一人でやるほど大きい器を持っていない。それに吾輩は野球をプレイしたことがないのだ。そして吾輩は目標の深い茂みを睨めつけ、思い切り紙袋を持った右手を振ったところで声がした。

「何してるの？」

「何もしていない。吾輩は今忙しいのだ。」

「ゴミ捨てるの？」

「そうだ。吾輩もたまには不良少年に……え？何だと？」

振り向いた吾輩の目に入っただのは一人の女性なり。黒い髪を肩ぐら

いまで伸ばし、休日だというのに見覚えのある学校の制服を着て右手に鞆を持ったこの美しい女性はい……。

吾輩の大好きな上弓さんだった。

「何捨てようとしてたの？」

上弓さんは吾輩の右手が掴む黒い紙袋を凝視している。くそ、何故こんな場面でよりもよって上弓さんと出くわすのだ。というか初めて喋った。生まれて初めて可愛い女の子と会話をしてしまった。吾輩、思わず顔がニヤけてしまうぞ。ああ吾輩なんて情けないのだ。

「あ、あの、見なかった事に、し、し、してれくれませんかかられ？」

ああ吾輩いつも緊張した時は日本語を話せない。何故か舌と唇が麻痺したような、寒さで凍える中で喋ろうとすると上手く動かない感覚と同じだ。

「こんな所にゴミ捨てちゃダメだよ。」

「は、はい！わが、わががが、吾輩は純粋な精……いや、青少年でありまっす！」

吾輩、自分でも何を話しているのかわからないでござる。西村でも河内でもいいから助けてくれ。吾輩は今いやらしい雑誌を捨てようとしている所を男達のアイドルに見つかってしまったているのだ。そうだ、これは罰だ。吾輩が悪事を働こうとした罰なんだ。

「あの、君、裏技クン？」

「吾輩……裏技……そうだ！吾輩は裏技クンと申す！」

なんと上弓さんは吾輩の名を覚えていてくれた。

吾輩は何とかこの場を凌ごうと脳内の引き出しを開けて適切な言葉を探しまくった。

「あ、あの、上弓さんはここで何を？」

そうだ。こんな人のいない場所で女子高生がポツンと一人にいるのはオカシイ。そこをつつこんだ吾輩は正しいであろう。

「さっき部活が終わって、帰りにここでいつも寄り道するんだ。ここ、人が少なくて落ち着くからさ。」

「そ、そうだな。確かに、ひ、人少ないぞぞな。吾輩も思ったよ。だからこのいやらしい…あの違う間違えた、吾輩の秘密詩集ノートを捨てに…。」

吾輩は意味不明な事を言ってしまった。秘密詩集ノートって何だ。しかしこの一言が吾輩を幸福の世界へと導くことになるうとは…。本当に世界とはオモシロイ。

「詩集って、君、詩書けるの？」

「あ、吾輩、あいあ、か、書くでござりよう。」

「ふうん。」

吾輩、けつきよく雑誌を捨てられずに帰ってしまった。

おまけに玄関で転んでしまい、紙袋の中身が飛んでいき、母親の顔にぶつかるという吾輩が最も恐れていた最悪の事態が巻き起こってしまった。母親には苦笑いされた。正直それだけで終わりホッとした気持ちだが、さあ明後日からどうしようか。上弓さんに話しかけても良さそうだ。

そう思い思い吾輩は今日も弾幕に立ち向かう。というか避けると言った方が良いのか。

そして明日は日曜日。実は西村達と約束しているのである。何やら相談があると言われたので昼の十二時に駅前のコンビニで待ち合わせしている。さて、相談って何のことだろうか。恋のことか、それとも勉強のことか。今時の男子高校生の悩みとは如何なるものなのか。とりあえず、待ち合わせ場所に行けば金髪の不良少年達がバツト持って待ち伏せしていて、吾輩はハメられていたという結末を迎えないように。西村達はそんなことしないだろうが、吾輩に人を見抜く力などない。正直ちよっと心配だ。とか考えれば余計に心配になってきた。吾輩、痛いのは苦手だ…。

そして吾輩はそんな不安と緊張を胸の中に押し込んで、そのまま眠りについた。

*

朝、いつものように暖かい気温と楽しい夢を見たような夢心地

に足取りをフラつかせながらも起床した現在時刻十時過ぎ。吾輩はすぐに階段を下りて食事を済まし着替えた。

待ち合わせ場所まで、近所のバス停からバスに乗り終点まで行けば到着する。

吾輩はMP3プレイヤーをジーパンのポケットに入れ、そこから管を耳まで伸ばして町の雑音を掻き消す生命維持装置は完成した。一人で行けるにはコレがないとトテモやっていけない気の小さな吾輩である。

最近の良い天気が続くなあと思いながらバスに乗った吾輩は、右手にバスの回数券を握りしめ一番後ろの窓際に座っていた。窓の外の風景をボーッと見ている。耳の中にはコーシンのハーモニカの音色が入ってくる。どこか切ないメロディと吾輩の知らない人達が行き交う町の様子が上手くハマリ、吾輩は少し精神が高揚してゾクゾクと込み上げる何かを感じた。

そしてバスは駅前へと到着し、吾輩がバスから下りるとコンビニが見えた。

どうやら西村達はまだきていないらしい。吾輩はしばらくの間、コンビニの前で待っていることにした。

たくさんの人達が吾輩の目の前を通り過ぎていく。ある人は忙しそうに、ある人は楽しげに、ある人はのんびりと。人によって行き先が違うのは当たり前のことだが、何故か不思議に感じた。吾輩もこの中の一人なんだとな。この綺麗に澄み渡った吾輩の大好きな青空も、吾輩だけのものではない。だがしかし、吾輩のものでもある。誰もが自分だけの空を持ち、自分だけの視界を持つ。視界が世界の全てならば、その狭いソレの中で人と人が出会うなんて、やはり難しいことだな。さて疑問に思ったが、吾輩は何を言ってるのだろうか。

そしてこんな事を考えているうちに二人がやってきた。

「おす！遅くなってすまなかった！」と西村が笑顔で近づいてきた。

「おお、ごめんよお。」と後ろからは長身を揺らしながら河内。

「相談があるというから吾輩きたのだが、いったいどうしたんだね？」

「いやあ、まあそれは店にでも入ってゆつくりとな。」

そう言つて西村は胸を張るように先頭をスタスタと歩き出し、もう一度振り向いた。

「ハンバーガー屋でいいよな？」

吾輩は黙つてうなずいた。

*

最も人が集まる駅前のデパート。服屋やら装飾品屋などが並ぶ店内や店前には、いかにも最近の若者というべき人達が様々な衣装に身を包みゾロゾロと歩いている。そんな場所にある二階建てのファーストフードショップに今いる吾輩だが、こんな所にきたのは初めてだ。吾輩は魚の白身がパンに挟まっているハンバーガーを注文し、西村達に導かれるまま二階へと上がり外のテラスみたいな所で食べながら食事をすることにした。

「で、相談なんだけど、いいかな？」と西村が口を開いた。

次に西村と河内はお互いに顔を見合つて「お前が言う？」「いやお前が言つてくれよ。」などと小声で言葉を交わし合つた後に、西村が咳を一度コホンとしてから吾輩を見て言つた。

「えっと、裏技は、音楽は好きか？」

「音楽、吾輩はトテモ好きだぞ。」

西村は一度下を向いて、顔を上げてコーラを一気に飲み、それから口を開いた。

「どうだ。一緒にバンドみたいなのやらないか？」

「バンドとは、あの大勢の人間を前にして楽器等を演奏する会のことか？」

「んーまあそうだな。」

吾輩は困つた。音楽は大好きだし、作るのも嫌いではない。しかし自己紹介のアレを見てわかるだろうが本番に弱いのだ吾輩は。さあどうしようか。ここで簡単に返事をして後で無理と言つて断るのも

悪い。それならばここで断っておく方が良いのか。

「バンド、それはやってみたいものだが、吾輩にできるかどうか。」
と吾輩はあやふやな返事をしてしまった。

「いいんだ。時間はまあまだある。」西村は笑いながら言った。

「吾輩、やるとしたら何をやればいいのだ？」

「えっと、俺がギターボーカルで、河内がベースだ。裏技はドラムやってくれ。」

ドラムとな。そりや吾輩の特技であるが、しかし特技と言っても人並み以下という真実は避けられない。

西村は困る吾輩を煽るように言った。

「噂によれば上弓さんは激しいのが好きらしいぞ。俺らで激しい曲をプレイして上弓さんの目をひかせようぜ！」

吾輩の心はなんて弱いんだろうか。

「それならば、バンドとやらを組んでも良いぞ。」

馬鹿な吾輩がやる気になっていると、河内が余計なことを言った。

「まあ、モテたいがためにやる音楽なんて音楽じゃないがな。」

場は静まり返る。

静かになると、後ろに座っているカップルの騒ぎ声が耳にキンキンと響いてくる。

「ま、まあ、やるだけやってみようぜ！」と西村が言った。

「やるからには真剣にやるよ俺は。」と河内。

「吾輩どうしたらいいのだ？」と吾輩。

とまあ、とりあえず話の流れで三人はバンドを組むことになったわけだが、実は吾輩は中学生の頃にドラムに目覚め、密かに一人で練習していたのだ。図書室に毎日通っていた吾輩の中学生時代、たまに見つけたドラムの教本を読んでみて、鉛筆等で練習してみたところ、これはおもしろいと思った。それ以来ちよくちよくリズムを部屋でよく刻んでいる。

しかし本物は触ったこともないし、スティックさえ持ったことがない。

吾輩達はその後、ファーストフードショップのすぐ近くにある楽器店に向かい、そこで吾輩はドラムのスティックを購入することにした。さあ吾輩どうなるのか。

その日はそのまま家に帰り、いつものように部屋へ戻り眠りについた。

そしてこの晩、奇妙な夢を見た。

*

ここは家の近くの公園だ。ただ真っ暗でほとんど何も見えない。吾輩はこんな所で何をしているのだ。それからよく見ると、目の前には上弓さんと西村と河内が立っている。三人はそれぞれ一本ずつ蠟燭を持っており、吾輩はその蠟燭にライターで火をつけていく。河内、西村、上弓さんという順番で。やがて目の前がパツと真っ赤に染まり、目が覚めた。

*

そして次の日。

今日から吾輩達の練習が始まる。

何やら西村の家の近所に無料でスタジオを貸してくれる施設があるらしいので、吾輩達は学校の帰りに毎日そこに通って練習している。晴れの日はもちろん、雨の日も、風の日も、風邪の日でさえ。

「バンドの名前は何にする？河内、何かいいのない？」

「俺は知らん。」

「じゃあ裏技は何ない？」

「吾輩か？吾輩は…そうだなあ。上弓さんは過激な方がいいのであるから…」

スタジオは練習の場でもありながら、吾輩の居場所ともなっていた。ずっと自分の部屋しか居場所がなかった吾輩にとって喜ばしいことだ。

それにしても今年に入り何もかもが全て吾輩の望み通りに進んでいく。まるで今までの絶望的な孤独感をスパッと斬り捨てるかのようにな。

「バンド名、決まったぞ。」と西村は一枚の紙をアンプの上に置いた。

吾輩と河内が紙を覗き込む。

「ほう、何々。お、いい名前だ。」

「そうだな、吾輩もこれでいいと思うぞ。」

その小さな紙一枚に書かれた数文字が吾輩達三人を繋ぐ。それは宇宙空間を漂う人間の命綱のように。何があっても、三人はその名の下に集結する。それぞれ与えられた技能を持ち合わせ、重ねることによって生み出される一つの物語。吾輩達は本番、その物語を大好きな上弓さんにブツけるのだ。さあ上弓さんは、どのような夢を見してくれるのだろうか。

「十月の学校の文化祭で俺らのライブが決定したぞ！」

「お、ナイス西村。」

「吾輩、緊張してきたぞ。」

吾輩達は、こうして毎日毎日練習を繰り返した。何度も何度も自宅にて苦手な部分を繰り返し練習し、そしてスタジオで全てをブツけ合う。

しかしそのブツけ合うという行為が、後に破滅を呼んでしまった。

*

八月になり夏休みになったが、吾輩達はほとんどの時間を練習に使っている。ライブ本番で演奏するは某海外アーティストのコピー三曲。吾輩はツインペダルを使用し、ハイハットペダルを踏みつつのバスドラムを必死に練習している。もちろんサビ手前の盛り上げ時に使うオカズも、何度やっても同じ音が出せるように練習している。そしてある八月の晴れた日。スタジオは蒸し暑く、メンバーはイライラしていた。

そこで河内が突然言い出した。

「俺らのやってる事って、バンドじゃないよな。」

吾輩はタムまわしに夢中であまり深く考えなかったが、それを聞いた西村はギターを置いて河内に言った。

「バンドじゃないって、どういうことさ？」

「いや、俺ら、ただ自分のテク見せ合ってるだけじゃないか？」と河内は言う。

続けて河内は俺に言った。

「ちよつとすまん、ドラム止めてくれ。」

吾輩は手を止めて、イスに座ったまま話を聞いた。

河内はベースに貼ってあるシールを手で触りながら吾輩と西村を交互に見て言った。

「ライブって、客を楽しませるもんだよな？」

「そりゃそうさ。」

「吾輩もそう思うぞ。」

河内は溜息をついてから言った。

「正直このままライブやってても、楽しいのは演奏してる俺らだけで、見ている客の方は全然楽しくないと思うぞ。」

確かにそりゃそうだなと吾輩も言われてからだが思った。何故と聞かれると上手く答えることができないが、なんとなくわかる。

「河内はどうしたいんだ？どうすればいいと思う？」

「もう少し、お互い譲り合った方がいいんじゃないか？ギターはうるさいし、ドラムは先走るし、正直むちゃくちゃだよ。」

そう言って河内はベースを地面に置いて、勢いよくスタジオの個室から出て行った。

十分ぐらい経過すると戻ってきた。どうやら、おなかの調子が悪かったらしい。それは仕方ないなと吾輩は思った。おなかが痛くなるのは誰にだってあることさ。吾輩だってプリンいっぱい食べたら次の日あたりにバチが当たるからな。

とりあえず河内が言いたかったのは、みんな好き勝手に演奏するかバラバラだって事だろう。まあそりゃそうさ。みんな上弓さんに好かれるために目立とう目立とうと必死だからな。「でも、それがいけないんだよ。」河内は言う。

「ああわかったわかった！もう誰が上弓さんに好かれようと知った

こつちやねえ！」

西村は何かを理解したかのように、ギターを持った。そのオーラはいつもの攻撃的で派手なものではなかった。

*

そして夏休みも折り返し地点となり、だんだん気温も涼しくなってきた今日、スタジオは予約が取れなかったため吾輩は一人で散歩することにした。

吾輩は久しぶりにあの川原へと足を運ぶことにした。今日は黒い紙袋もいやらしい雑誌も持っていない。その代わりに吾輩、あの人がいるかもしれないという微かな希望を右手でギュツと握り締めた。ちなみにアレ以来、上弓さんとはずっと会話していない。挨拶さえもない。学校外で会うとあれだけ普通に話せたのだが、何故か学校で会うと話しかけ辛い。それは上弓さんのまわりに他の女子生徒が集まっているというのも話しかけ辛い要素の一つだ。

吾輩は自転車で坂を下り橋を渡り、そして川原に到着した。現在時刻午後の三時前ぐらいだと思う。普段時計を持ち歩かない吾輩には体内時計という能力が備わっているのだ。

川原で吾輩は上弓さんを探す。キョロキョロしていると、やはり吾輩の思った通り上弓さんはそこにいた。

「あ、あの、吾輩……」

「あ、裏技クン。」

川の流れる音や堤防を走る自動車の音をBGMにして、吾輩は一種のパニック状態とも言える酒に酔った勢いみたいな状態に陥った。

「あの、隣に座ってもよろしいかと吾輩が尋ねたところ、あなたは何と返事をしましたか？」

「いいよ。」

吾輩は、おしりからレーザーが出るかと思うほど身体が熱くなった。それはサイケデリックトランスの盛り上がり前の異常なジラしから解放された瞬間のごとく吾輩の身体は宙に舞い空を飛んだ。世界は二つに分離され、この真っ暗な空間に吾輩と上弓さんの二人だけと

なった。

バスドラムが胸のあたりでドスドスと音を鳴らしている。ハイハットの高音がチャキチャキと頭の中の闇を切り裂く。スネアがタン…タン…タンと一度鳴るごとに霧が晴れ吾輩は我に返っていく。そうだ、これは夢だ。吾輩はこんな所にきた覚えはない。

吾輩の脳内に全てを引き裂くようなキィィィという超高音のノイズが無数のダンゴムシを引き連れて侵入してきた。

吾輩は…こんなところにいる人間ではない。

目の前が真っ暗になった。目を開けているのに何も見えない。歩いても歩いて何も見えてこない。そんな状態が何時間ほど続いたのだろうか。吾輩が感じたのは異常な時間の流れだった。上手く言葉に言い表せないが、何百時間も…何千時間も経過したように思えた。やがて光が漏れる隙間を発見し、吾輩…いや俺は、光の渦巻く方へと自分の意思とは別に、自然と吸い寄せられるように向かって行った。

まるで街灯に集まる蛾のようだな。

俺は光の中で河内を見た。西村も見た。島島先生も見た。今まで見た全ての光景を一秒以下の間に見てしまった。高速スライドショーは終わった。これからはリアルに俺は歩く。その根拠は地面に足がつく感触を覚えたからだ。

ふわっとなった。

俺は…いや、吾輩は、孤独などではなかったのだ。

光に包まれた吾輩は、気が付けばいつものあの公園にいた。もうすっかり夜遅くなり真っ暗になっている。もちろん立っているのは河内と西村と上弓さん。見れば蝋燭の火が消えている。

三人は涙を流し、こちらを白い目で見ている。吾輩はゾツとした。

この世の終わりを目の当たりにした白いウサギのよう。

そして三人の横、ブランコには吾輩が座っている。吾輩と言っても今こうやって語っている吾輩ではなく、もっと昔の過去の見覚えのある。これが本来の姿とでも言うのか。

「ダンゴムシさん、足いっぱい。」

何年か前の吾輩は毎日この公園で一人で遊んでいた。ダンゴムシを捕まえて、自作の曲を歌って、ブランコに乗り、孤独だった。

「あなたは幸せそうだな。」と吾輩が脳に直接語りかけてきた。

吾輩の中で何かが生まれようとしている。

「あなたは幸せそうだな。」

「あなたは幸せそうだな。」

黙れ吾輩よ。

「空は、見えたかい？」

…。

吾輩は夢を見ていた。

そうだ。全て夢だったんだ。人間なんて砂時計のようなものだ。流れるだけ流れて最後にはスッカラカンになり何もかもを失う。そのころの記憶とは。

吾輩は、何をしたいのだ。

「十月のライブかあ。それはそれは客の大歓声に包まれたよ。一部のコアなメタルファンなんて発狂してステージに上がりこんでたし。」

男はしばらく間を置いてから言った。

「もちろん、上弓さんも。」

吾輩は夢を見ていたのだ。夢に違いない。こんな、こんな事が。

「上弓さんと裏技がああ。まさか。」

脳の中を走りまわるノイズを誰か消してくれ。頭痛と吐き気が酷い

…掻き乱される。

「あなたは幸せそうだな。」

吾輩は言ってやった。

「ああ、吾輩は今とても幸せだよ。」

そして全ての記憶が一瞬にして、高速で、逆再生されて、そのままフェードアウトして消えていった。

吾輩は思い出したよ。

全てを。

*

コッソ…コッソ…。

う…何処だここは。

コッソ…コッソ…。

誰だ。

コッソ…コッソ…。

誰かくる。

コッソ…コッソ…。

足音が近づいてくる。

コッソ…コッソ…。

と、足音はそこで止まった。

ハッと目が覚めた時、コンクリートの天井が俺に「おはよう」と笑顔で挨拶した。

「ああ、おはよう」

自分が発した聞き覚えのない男の声は、狭いコンクリートの壁に響き渡りフェードアウトしていった。

冷たいコンクリートの上で眠っていたせいか、背中あたりが酷く痛む。

さて、自分は眠っていたというが、果たしてそれが本当に正しい表現方法なのか。

今の状況の場合は眠っていた感覚というよりも、今生まれたという感覚の方が正しい。

コイツは誰だ。

今ここにいるコイツは誰だ。

俺は頭をかいた。ベトベトの長い髪の毛が指と指の間に絡みついている。

裸足でジーンパンに赤いトレーナーを着ていて、体全身が汗まみれ。身体がネチネチとして気持ちが悪い。

そして今いるのは心臓の音しか耳に入らないぐらい、とても静かな

場所。

かなり狭く、自分という固体以外には一切何も無い無機質なコンクリートに囲まれた部屋。

窓どころか、隙間さえ無い為に、この部屋は太陽の光なんてものはない。

その代わりに一本の汚い蛍光灯がパチパチと点滅している。

そして正面には見るからに分厚そうな鉄のドアがある。

ところどころ錆びていて、長い間放置されていた廃墟のような建物を俺は思い浮かべた。

自分の名前も知らない、おまけに場所さえもわからない。

ここは何処ですか。

全てがコンクリートの壁に遮断され、現在地は愚か時間も、朝か夜かさえも知ることができない。

俺が何故そんな意味不明な空間にいるのかと問われると、それは俺にだってわからない。

言うまでもなく、記憶なんて言葉は俺の辞書からとつくに消え去っているからだ。

そんな自慢気に言う事ではないが、とにかく部屋から出よう…。

俺はとにかく、ここから出たかった。

何も無く静かで狭く外の様子が何もわからない絶望的な部屋。

俺は分厚いドアにチョコンとついているオデキのようなドアノブを軽くひねった。

ガチャン…。

そして俺はドアに体重をかけて、奥に押してみた。

ギィィィィィィ…。

ドアは物凄い不快な高音を発しながら、ゆっくりと開いた。

痺れ気味の手足を荷物として引きずりながら、俺は部屋の外を見た。長く続く暗い廊下に、たくさん同じ形をしたドアが並んでいる。

ああ、この景色を見せられた誰もが思うだろう。

ここは刑務所だ…。

俺は記憶がないから何も知らないが、きっと何か悪い事をして逮捕されたに違いない。

そしてこの刑務所のこの部屋に閉じ込められて…。そこで俺は自分の考えを否定した。

刑務所なら何故ドアにカギをかけない。

ますます何もわからなくなってきた。頭が痛い。何も思い出せる気配がない。

とりあえず落ち着こう。

俺は高鳴る心臓の音を必死に抑えて、まわりをもう一度よく見渡した。

ここは、おそらく地下だろう。蛍光灯以外の光が全くない。

俺がいた部屋は廊下のちょうど真ん中あたりにある。俺は左右をよく見た。

地下にしては階段が見当たらない。

俺は今にも抜けてしまいそうな弱弱い腰を持ち上げて、壁に手をつけて歩いた。

人の気配が全くしない。俺以外に誰もいないのだろうか。

これほどまでに静かな空間は恐怖どころでは済まされない。

何か、違う世界に自分一人だけ…。なんというか、除外されたような感じた。

俺は人を探すことにした。

一人では怖い。何か出そうで仕方がない。廊下の奥あたりに薄っすらと人影が見えるような気がしてきた。

その人影がだんだんと濃いさを増してき、俺の目の前で立ち止まった。

見た目からして女性と思える。長い黒髪にボロボロで薄汚れた学校の制服を着ている。年齢は十七か八か。

「あなたとは初めて会いますね。」女は話しかけてきた。

「あの、ここは、どこなんですか？俺は誰なんですか？どうすれば外に…」と言いかけたところで女が口を開いた。

「もう二度と出られませんよ。あなたの事はわかりません。私も自分の事を知りません。」

なんと、この女性もまた自分の事を知らないと言い出した。しかもここから出られないって。

からかっているのか…。と思ったが、その女の表情を見て、そうではないとすぐにわかった。

まるで自分の家族全員が同時にパツとアノ世へ旅立ってしまったかのような、なんとも絶望的な目をしている。

俺的ベスト、目が死んでいるの代名詞候補一位が目の前にいる。

「私は、ずっとここにいます。あなたは今日から?」

「ああ、さつき気が付いたところだ。」

この女は、ずっとここにいると言った。

一体どれぐらいここで過ごしているのかと聞いてみた。

「わからない。時計も陽の光も何もないから何日が経過したのかわからない。」

「何か、外に出る方法は無いのか?」

女は答えた。

「ありません。誰もがここで意識を取り戻し、そのままここで死んでいきました。」

「どこかに出口や階段は…。」

「どこを探そうが同じです。ここは完璧に外から閉鎖された場所であり、部屋以外のドアもありません。」

なんということだ。

俺はこのまま意味も理解できずに、この意味不明な場所で死んでいくというのか。

「あなたと私も含め、ここにいる人達は全員同じ絶望の中にいるのです。」

女は涙も流しきったようなカラカラの目で下を見て、髪の毛一本よりも細く微笑んだ。

その微笑みは幸福や快感からくるものではなく、諦めからの微笑み

だと俺は確信した。

これは本当に駄目なのかもしれない。

そこで俺は女のさっきのセリフを思い出して、一つ思った。

ここにいる人達全員って、他にも誰かいるのか？

「ええ、おそらく私達を含めて十人は、ここで暮らしています。」

続けて俺は質問した。

「誰がどうして、俺達をこんな目に合わせるんだ。」

「それは……。神の悪戯とでも思っているのが一番だと思います。」

神の悪戯……。どういうことだ。

「不思議な事に、誰かが死ぬと、入れ替わったように死体は消えて新しい人が入ってきます。」

その後には女は言った。どうやら外からの出入りは全くないそうだ。

一体誰が死体を取り除き、新しい人を部屋に入れているのだろうか。

「それがわからないのです。だから私達は人間の仕業ではないと思っています。」

確かに人間の仕業ではなさそうだ。

人間を入れ替えるのには何らかのトリックがあるのかもしれないが、人間の記憶を消すというのは絶対にムリな事だろう。頭を殴られたかと思っただが、目立った外傷も全くない。

頭痛は微かにするが、これは殴られたという痛みではなく、何か精神的なものからくる痛さだ。

そこで女が小さな口をパクパクさせて言った。

「私は七号室です。あなたは六号室ですよね。」

俺は後ろを振り返り、自分の出てきた部屋の扉を見た。

すると茶色く錆びたドアに大きく無造作に「6」と白いペンキで塗られていた。

そして斜め右を見ると同じように「7」と書かれたドアがあった。

廊下を挟んで一号室と二号室が対面、その隣に三号室と四号室が対面と、その法則で十号室までジグザグに並んでいた。

俺がこうして部屋の順番を頭で理解していると、どこからか声が聞

こえてきた。

女性の叫ぶ声。キリキリと耳障りな高い声で泣き叫んでいる声が。

「アア神ヨ…助ケテ下サイ…コンナトコロデ死ニタクナイ…誰力…誰力…」

女性の叫び声はゴホゴホとセキの音がした後に、だんだん静かになつていった。

「あれは五号室の方です。いつも目の前の絶望を憎み泣き叫んでいます。」

俺は大変なところにきてしまったようだ。手ぶらで、記憶さえも持たずに。

「ここにいる人達はみんな同じです。記憶をどこかに忘れてきた人ばかりです。」

女の顔には相変わらず諦めて開き直ったような微笑みが見えた。

俺は自分の記憶を取り戻す事と、ここから出る事、その二つを絶対に成さねばならない。

別に理由があるワケでもなく、ただ俺がそうしたいから。いや、誰だってそうするだろう。

何か喉につまる感じがする。

そこで女は俺にお辞儀をして「また、お暇なら七号室にきて下さい。」と言い部屋へ戻って行った。

ガチャリ…キイイイ…という音と共に彼女の姿は視界から消えた。そしてずっと俺はトイレに行きたかった。

まわりをよく見ると、六号室の前から見て一号室よりも奥の廊下の突き当たりに部屋があった。

俺はその部屋に近づいて、「トイレ」とペンキで書いてあるのを確認した。

白い文字は錆びて鉄と混じり、まるで血文字のように見える。

俺は怖くなったが、どうやらトイレはここしかないようだ。仕方なく中に入る事にした。

物凄く汚く、酷く臭う。狭い室内に和式便器がチョコンと設置され

ている。

本当に俺達は酷い扱いを受けているな。

そして溜め込んでいたモノをスッキリ爆発させた俺は、自室に戻った。

厚くて重いドアを開くと、そこには俺が最初に眠っていた何も無い部屋があつた。

ベッドなど有るハズもなく、毛布やシーツなんて贅沢なモノもない。俺は冷たく汚れたコンクリートの上に寝転がった。

天井の蛍光灯をジツと見つめて、眠っている過去の記憶をなんとか叩き起こそうと頑張ってみた。

だが俺の努力は空振り、空振り、空振り、アウトになった頃には眠ってしまった。

夢の中、たくさんの機械と注射器が見えた。

激しく頭が痛み、閉じている目を更にグツと閉じた。

「……………うう。」

あれから何時間経過したのだろうか。

俺は目が覚めた。

目が覚めたのだが怖くて目を開く事ができない。

もし目を開いて、まだ同じ景色が目の前に広がっていたらどうしよう。

最後に、ネムリにつく前に見ていたアノ天井が見えたらどうしよう。

逆に、今までのコンクリートの世界は悪い夢だったという事を期待し、俺は目をゆっくりと開いた。

もう一度、目を閉じた。

そして開いた。

それを何度か繰り返して、やはりまだ同じ場所にいる事をハッキリと確信した。

夢じゃなかったのか。

あと俺は思った事がある。

今の俺は記憶がない。

しかし太陽や時間の概念は頭の中に植えつけられている。

という事は、最初から記憶が無いのではなく、どこかで記憶を失った事になる。

それから推理すると、記憶が消えるまで俺は外にいた。

そして何が理由か知らないが、いつの間にかココに閉じ込められた。そんな事を考えているうちに外が恋しくなった。

陽の光を浴びたい。風呂にも入りたい。あと腹が減った。

ここで俺は、部屋の隅に置かれた白飯と漬物と水を見つけた。

寝ているうちに誰かが持ってきたのか。

いや、あの重くて厚いドアを開ければ、いくら寝ていたとは言え音で気付くハズだ。

おまけに誰もここに入ってくるヤツがいないと、あの女も言っていた。

どうして…。誰がどうやって…。と考える思考力は腹が発したグウという音によりストップした。

とりあえず今は何も考えないで、目の前にあるメシを食うのが一番だ。

白飯を口に入れて、漬物も入れて、また白飯を入れて…。

こんな大変な時でも「おいしい」という感情はいつもと変わらない。こうして俺が何とも言えない気分で飯を食っていると、ゴンゴン…と、ドアをノックする音が聞こえた。

俺は残り少しの白飯を一気に食べて、すぐにパツと立ち上がり「ハイ？誰でしょうか？」と声を出した。

ドアの向こうからは男の声がした。

「一号室の者です。」

俺はすぐにドアをギギッと開いた。

目の前に立っているのは、ジーパンにグレーのシャツを着た男性だった。

髪の毛が少し薄くなっているところを見れば、四十歳後半ぐらいだろうか。

俺が、どうしていいのかわからないままつつ立っていると、男が口を開いた。

「一号室の…名前はわからない…えっと…挨拶にきました。」

なんとノンキな男だ。こんな状況に置かれながらワザワザ挨拶をしにきたと言うのか。

そして男は俺の部屋に現れた食器を見て、それを指さして言った。

「あ、その食器は、元あった場所に戻しておくのがココの決まりなんです。」

「わかりました。わざわざどうも。」

「えっと…六号室さん…。とりあえず、こんな状況ですがお互い頑張りましょう。」

そうして一号室の男は、ひ弱そうな笑みを浮かべて頭を下げた後、また部屋に戻って行った。

なんというか、そのひ弱そうな笑みはアノ女とは違う、絶望感というのが全く感じられない笑みだった。

おそらく、カナリのノンキオトコなのだろう。まさか誰かが自分から挨拶してくるとは思わなかった。

彼もまた記憶が無いのだろうなと思うと、自分の状況を共有できる人物が何人かいる事に少しだけ安心感を持った。

この無機質で冷たい世界に俺一人だったら、耐えられなくなってしまうに今頃ボタンと倒れて気絶しているだろう。

そう思った瞬間に七号室のアノ女を思い出した。

七号室へ行こう。

一人でボーっとしていると不安で仕方がない。

俺は六号室を出て、斜め向いにある七号室へと向かった。すると五号室の中から今日も女の叫び声が聞こえてきた。

「アアア…何デコンナ事二。死ヌヨリモ辛イ絶望。誰力私ヲ殺シテ…。」

頭に響く耳障りな叫び声を俺は気にしなかった。

気にすればするほど、俺の頭がオカシくなりそうで怖かった。

絶望：死ぬよりも辛い：確かにそうかもしれないな。
俺はソナ事を考えちゃいけないと頭を振り回した。

そして五号室の女の声を意識しないようにして、七号室のドアをゴンゴンゴンと手の裏で叩いた。

何秒か間をおいて、中から見覚えのある女子高生が出てきた。

「きてくれたんですね。」

女は薄く微笑み、「どうぞ」と一言だけ言って部屋の中に入った。

それを追うように俺も中に入り、女の正面に立って部屋をキョロキョロと見た。

やはりココも俺の部屋と同じように、無機質で何もなく冷たい空間が広がっていた。

「どうぞ、座って下さい。」

俺は女と同じタイミングで地べたに座った。

相変わらずコンクリートの冷たさが服を通じてキーンと直接肌に伝わってくる。

この世界にいる限り、温もりなんてもの味わえないのだろうか。

女はいつもの薄い笑みで黙ってこっちを見ている。

何か話そうか：と思った瞬間に女が口を開いた。

「まだ、他の部屋の人とは会ってないのですか？」

「いいや、さっき一号室の男が部屋に挨拶にきましたよ。」

「そうですか。私も最初に目覚めた時、アノ人が私の部屋にきましたよ。」

「では、あの人はアナタよりも先にいたんですね。」

そこで少しの間、静寂があった。

記憶もないし、相手とは関係も薄いし、何も話題がない。

今頃になって俺は七号室から出てきた時の彼女の表情を思い出した。
アノ時も相変わらず細くて薄い仕方なく作ったような笑顔だったが、何か違う。

どこか、絶望を忘れていたかのような、そんな感じがした。

この女も一人で不安だったのだろうか。

そして女が再び口を開いた。

「九号室の人には、まだ会っていませんよね？」

「九号室は知らないよ。俺が知っているのは一号室の男と君だけだ。」

女は少し暗い表情をした。

「あの、九号室の人には注意した方が良いでしょう。」

「え、どうしてですか？」

「九号室の人は…何か変なんです。」

何か変って、どういう事だ。

「とにかく九号室の人とは関わらない方が…。」

女は下を向いたまま言った。

「ああ、じゃあそろそろ俺は部屋に戻ります。」

「わかりました。ではまた。」

女は急に頭が重くなつたように下を向いた。

俺は女の視線を背中を感じながら、ドアを開けて外に出た。

ガチャンとドアを閉めて後ろを振り返ると、そこには見た事ない人が立っていた。

背が高く、赤いワンピースを着た大人の女性。

「あら、あなた新入り？」

女は首を傾けながら俺に言った。

「はい。えっと、何時間前かわからないですが、新入りです。」

「そう…。大変ね。」

「あなたは何号室なんですか？」

「そんなこと聞いてどうすんの？私は十号室だけど。」

「ああ、俺は七号室です。別に何もありませんケド。ただ聞いてみただけです。」

「そっか。」

そう言つて、その大人の女は三号室のドアをノックした。

あれ、あの人、十号室って言ってたよな。

しばらくして三号室のドアが開いた。中から「入れよ。」と男の声

がする。

大人の女は「はあい。」と楽しそうに言いながら中に入った。
なるほど、そういう事か。

どうやら十号室の女は三号室の男と仲良くやっているらしい。

こんな異常な事態の中でよくあんな楽しそうにできるよな。どんな
神経してるんだ。

そう心の中で呟きながら、自分が女の部屋から出てきた事を思い出
して、俺も最終的には…と考えた。

そして俺は自分の何もなく冷たいコンクリート空間に戻った。

俺は部屋の隅に仰向けで寝転がり、天井を相手に独り言をブツけた。
ここから出る事は絶対に不可能。

もう開き直って、ここで楽しく暮らすか。

いや違う。こんな場所で楽しくなれるハズがない。

俺がこうやってコンクリートでできた世界の中に閉じ込められてる
間も、外では楽しく誰もが暮らしているのだろう。

そう思うと、やってられなくなる。

何故、俺だけこんな場所で…先も見えない生活をしなければならな
いんだ。

光も届かないジメジメと湿った地下室で、風呂にも入れず、好きな
飯も食えない。

どうして俺が…。

…。

そのままネムリについた。

またもや、どれぐらいの時間が経過したのかわからない。

何時間も眠っていたのか、それとも少しの間しか眠っていないのか。
普通なら時計や陽の光で、起きた瞬間にパッとわかるものだが、そ
れさえもわからない。

この世界は人の概念まで狂わせる。

俺は寝起きでフラつきながら、トイレへ向かった。

まるで、記憶にない自宅のドアを開けるように、すっかり慣れてし

まった分厚いドアをガチャリと開けて廊下に出た。

廊下の突き当たりにある汚いトイレのドアノブを軽く捻ると、鍵がかかっていた。

くそ、先客か。

俺はトイレの前でしばらく立って待っていた。

おそらく十人は暮らしているであろうこの世界。誰もいないのかと思わせるほど静寂が渦巻く。

誰かと会話していない限り、どこに行こうがキーンという耳鳴りが付きまとう。

そんな静寂を切り裂くようにガチャリと音をたてて開いたトイレのドアの影から背が高い青年が出てきた。

上下真つ黒の服を着た、暗い雰囲気青年。完璧に目が死んでいる。俺は声をかけた。

「あ、どうも。六号室の者です。」

すると青年は答えた。

「ボクって…どんな顔？」

「えっ…」。俺は言葉に詰まった。

青年はいきなり怒った表情をし、怒鳴った。

「鏡が無いから自分の顔が見えねえんだよ！お前の顔なんか見ても意味ねえよ！くそ野郎！」

俺は意味がわからなかった。

急にトイレから出てきた青年に、どんな顔をしているのかと問われ、キレられた。

こんな事、外の世界じゃありえないだろうな。

青年は黙っている俺をニヤつとした表情で見て、言った。

「この人間はね。みんな狂ってるの。ボクだけが正常なの。殺しちゃった方がいいとか？」

青年は俺に変な質問をしてすぐにギャハハハと爆笑し始めて、笑いながら地面に転がった。

俺は、この場をどう対処すればいいのか全くわからない。

青年は地面を手でバンバン殴りつけながら笑い転げている。

「ギャツハツハ！おもしれえ！鉄に囲まれて鉄人の気分だね！本当にブチ殺すぞテメエ！ギャハハ！」

俺はコイツと仲良くなれないなと思った。

そして青年を見下ろすと、手が地面を殴りすぎて血まみれになっている。

それでも地面をバンバンと殴りつけているから、見てるコッチが痛くなる。

「てめえ六号室って言ったよナア？」

青年は地面に手について物凄いニヤニヤ笑顔で俺を見上げながら言った。

俺は「はい。」と答えた。

「そうかあ…そうかあ…そうなのかあ…ヒヒヒヒ…六号室かあ…六号室っていいのかあ…」

そうブツブツ言いながら、青年は込み上げる何かを必死に抑えるように地面に頭をつけてグリグリしている。

青年は楽しそうにしているようだが、正直に言って俺は気まずい。

俺はこの不気味な青年が怖くなって、トイレに逃げ込んだ。

はあ…。

あの青年は自分だけが正常と言っていたが、あの青年だけが狂っているようにしか見えない。

表情といい、仕草といい、言動に思想…。その存在全てが不気味な青年だった。

ちなみに今の青年は、十号室の女と会っていた三号室の男とは違う。声が全く別人だった。

ならば、二号室か…四号室か…八号室か…九号室の住人だ。

そういえば七号室の女は、九号室の人に注意みたいな事を言っていたな。

もしや、今の危なそうな狂った青年がその九号室の住人なのか。いや、そうであってもなくても、今の青年には注意した方がよさそ

うだな。

俺はそんな事を考えつつ、トイレから出て狂った青年がいない事を祈りつつ、トイレのドアを開けた。

ガチャリ…と。

俺はドアの影から廊下をコッソリ覗いた。

廊下は人の気配なんてものを知らないと言わんばかりに静まり返っている。

うん…よかった…誰もいないようだ。

俺はドクドクと泣き喚く心臓の音をBGMに、自分の部屋へと戻った。

ギイイイ…ガチャン…。

すっかり聞き慣れた金属音。決して心地良さなど感じない。

そして俺は部屋の隅に白飯と漬物が置かれてる事に気付いた。

あれ、さっきトイレに行くまでは何も無かったハズだ。

とりあえず深く考えない事にして、白飯と漬物をバクバクと食べた。全て食べ終わる頃、残った漬物の沢庵を箸で摘んでジッと見た。

円形を半分に切り分けた形をした沢庵。コレを見ていると月を思い出した。

夜になると銀色に光り輝く月を。

今は夜で、月が輝いているのだろうか。

それとも今は朝で、太陽が地上を照りつけているのだろうか。

いや、雨が降っていて、朝にしろ夜にしろ太陽も月も隠れている可能性だってある。

雪が降っていたり、積もっているかもしれない。

カミナリが鳴り響き、台風が地上を荒らしまわっているかもしれない。

…今は何時なんだろう。朝なのだろうか…夜なのだろうか…。

外の景色が見えないのは、トテモ不安で仕方がない。

俺は何故か五号室の女の叫び声を思い出した。

死よりも辛い絶望か…。

確かに今ここで舌を噛み切って死ぬ方が楽なのかもしれない。

しかし、まだ諦めるワケにはいかない。

鎖に繋がれた犬、それ以下であろうとも、自由を夢見るのは誰だっ
て同じ。

俺も自由になれる日を夢見て、頑張っ、努力するしかない。

…。

いったい…何を努力すればいいんだろうか…。

俺は透明のコップに入った水を一気に飲み干して、地べたにゴロン
と寝転んだ。

それから一時間ぐらいか…いや三十分ぐらいか…。

ボーっとしている間に、俺に知る術がない時間という単位が経過し
た。

俺が天井を見上げていると、ゴンゴンゴンと部屋のドアを叩く音が
した。

俺はビクツとして立ち上がり、ドアを開けてから、開けなければ良
かったと後悔した。

しかし、ここで居留守を使おうが狭い世界の中で一生会わないとい
うのは無理であろう。

そして今、俺の部屋の中、同じ空間にアノ狂った青年が座っている。

「アア…アア…悪魔が…ボクを連れ出した…。」

黙って座っている俺の目を顔を斜めにして覗き込むようにグツと見
つめてニヤニヤしている青年。

…今度は悪魔ですか。

青年は突然、何かに気付いたようにビクツと動き、立ち上がり指で
俺を方を指した。

「オマエは悪魔だ！オマエがボクたちをコノ世界に引きずり込んだ
んだ！」

そう怒鳴ってから青年はまた地べたに座り、ニヤニヤとツメを噛み
出した。

「ハハハ…。正体がバレて驚いているのだろうか？ナア悪魔め…。悪

魔……。悪魔……。悪魔……。悪魔……。
俺は頭にきた。

「人を悪魔扱いするな。俺もここで最悪な生活をしているというのに、何故俺が悪魔なんだ。」

すると青年は俺から目をソラして地面を見ながらニヤニヤし、ブツブツとまた何か言い出した。

「悪魔だ……絶対に悪魔だ……俺は信じる……神を……いや信じない……神はいない……いたら今頃……俺はここにいない……。」

青年はそのまま立ち上がり、ブツブツ言いながら部屋を出て行った。本当に不気味なヤツだ。

九号室の狂った青年……。本当に気をつけないと危険だな……。

それからしばらくして、またゴンゴンゴンと扉を叩く音がした。

俺はドアを叩く音がする度にビクビクしている。わりと小心者だ。誰だろう……。また九号室の危ない青年か……。

それとも一号室の男か……。

ああ、そうか七号室のアノ女の子でありますように……。

そう思いながらドアをガチャリと開いた。

廊下に立つその人影を見て、嬉しくもないが助かった気分になった。

「どうも初めまして。アナタが六号室の新入りさんですか。」

体格の良いゴツゴツした顔の男性が笑顔で立っていた。

「先ほど七号室に入っていくアナタの姿を見たもんですから。」

いやぁ……と自分の後頭部を手でかきながら笑って、また一言、男は言った。

「僕は眠っている時間が多いので、六号室の人が入れ替わっている事に気付きませんでしたよ。」

俺は思った。そういえば俺がココにくる前は、俺の代わりにココで誰か暮らしていたんだよな。

「あの、俺の前の人って……。」

俺は聞いてみた。まあ正直、別に俺には関係の無い事だが。

男は開いているのか閉じているのかわからない目で俺を見て、話し

始めた。

「アナタの前に住んでいた人は、とても良い人でした。」

「どんな人だったんですか？」

男は腕を組んで、悲しそうな顔をして溜息をついた。

「背の低いおじいさんだよ。とても話しやすくて良い人だったんだがね……。」

「そうなんですか。」

きつと、そのオジイサンの前にも別の人がいて、その前にもまた別の人がいて……。

この世界、この世界に暮らす絶望の人達、ずっと繰り返されてきたのだろうか。

男は組んでいた腕を解放し、ドアに手をかけて言った。

「では、また何かあったらいつでもどうぞ。眠っていたらゴメンだけどね。」

そう言つて男はドアに触れていた手をグツと前に押して、ドアを閉じた。

ガチャン……。

俺は思った。

部屋番号を聞くの忘れてたと……。

今現在、俺の知っているのは人は七人。

まずは一号室の男。俺の部屋に挨拶をしにきたノンキそうな男だ。

二人目は二号室の男。直接会話はした事ないが、とりあえず危ないヤツでは無さそう。

三人目は五号室の女。いつもギャーギャー叫んでいるが、直接会った事はない。

四人目は六号室。そう、この俺だ。

五人目は七号室の女。俺がココにきて始めて知り合った女子高生。

六人目は九号室の青年。何か普通の人は違う危ないオーラが出ている。要注意人物。

七人目は十号室の女。三号室の男と仲良くしている大人っぽい女性

だ。

それから推理すると、今きた男は二号室か四号室か八号室の人という事になる。

全く何が「いつでもどうぞ」だ。部屋番号も知らないのに行けないじゃないか。

まあいいか。こんな狭い場所だし、いつでも会う機会はあるだろう。俺は先の見えない真っ暗な道を気長に歩く事にした。

いつかコノ空間から脱出できるだろうと少しだけ期待を持ちながら、そして俺は二時間ほど考え事をしたり妄想遊びをしたりしてから、夢の世界へ逃避した。

ここは…どこだ…。

駐車場らしき場所に俺は立っている。すぐ近くに売店と書かれた店があり、展望台のような場所もある。

少し雨が降っているのか、水溜りがたくさんある。しばらく歩くと自動販売機が三台ぐらい並んでいるのが見えた。

そこから左に曲がると、狭い下り道がある。

その狭い下り坂の途中にはお土産屋さんらしき小さな店がたくさん並んでいる。

アイスクリーム、ホタテ、イカヤキ、魚を売るオジサン、歩くたくさんの人達。

俺はその人ゴミに紛れて歩いていた。

坂を下り、階段を下りて、やがて崖の方に到着した。

荒波が激しく崖っぷちに体当たりを繰り返している。

気が付けば俺の手にはホタテを焼いたものがある。

ソレをパクパクと食べながら売店の裏に行った。

売店の裏にはオバチャンがいて、何やら叫んでいるが聞き取れない。その声が、だんだん、リアルになっていく。

最初は微かに聞こえていたのだが、もう耳元で叫ばれているようなヤカマシサ。

思わず目が覚めてしまった。

眠い目をコスりながらボーッと立ち上がったても、まだ声は聞こえる。俺は先ほどまで手の中にあつたホタテが、いつの間にか無くなっている事に気付き、少し落ち込んだ。

ああ、夢だったのか。

ホタテも、あの店の並んだ道も、全てが夢だった。

楽しい夢が覚めた瞬間に、俺はまたこの世界に連れ戻された。だが夢の世界から、今だに継続されている事がある。

そう、部屋のドアの向こう側から叫び声がまだ聞こえているのだ。

ああ…また五号室の人か。

俺は狭く薄暗い廊下に出た。

蛍光灯の下で一人の老婆が仰向けに倒れたまま叫んでいる。

茶色のセーターに緑色のズボン。顔をクシャッと真ん中に集めたようなシワだらけの老婆。多分、年齢は七十以上か…。

俺は五号室の扉が開きっぱなしになっているのを見て、この老婆がいつも叫んでいる女なんだなと思った。

老婆は目をカッと見開いた状態で天井を見て固まっている。

「どうしたのでしょうか？このお婆さん。」

そう言つて細い目で俺に声をかけてきたのは、部屋番号不明のあの男であつた。

男はタルンタルンになったシャツを両手で正して、お婆さんを心配そうに見ている。

老婆を挟んで立っている俺と体格の良い男。他には誰も廊下にいない。

ボーッと老婆を見ると、再び老婆が叫び出した。

「アア見エルゾ…外ノ世界ガツ…。」

この老婆もまた不気味だなと俺は思った。

「アア…明ルクナツテイク…記憶ガツ…蘇ツテイク…。」

老婆は仰向けで表情を固定したまま頭を両手で押さえた。

「私ハ外ノ世界デ生キテイタ…アア…暗イ地下室…男ラガ…。」
すると突然、老婆が暴れ出した。

「ヤメロツ…ヤメテクレツ…アア…。」

老婆はカクンと頭の力が抜けたように、そのまま動かなくなった。俺はどうすればいいのかわからない。

すると男が老婆の首筋にソット手をあてた。

「…死んでいるようです。」

「…。」

なんという事か。

老婆は記憶が蘇るとか言い出したと思えば、もう死んでいた。

俺は怖くなった。

人が死ぬ瞬間なんて、おそらく初めて見たと思う。

過去の記憶は無いケド、なんとなくそう思う。

老婆は記憶が蘇ったと言っていたが、それは本当なのか。それともタダ適当に言っただけなのか。

老婆が死んでしまった今、その答えを知る術はない。

俺も、いつか記憶が蘇るのだろうか。

そんな事を考えている俺の横、男が老婆を抱きかかえて五号室へと運んだ。

それからガチャンと五号室のドアを閉めて廊下に出てきた男が言った。

「あの老婆が言っていた、暗い地下室というのはココのことでしょうか？」

暗い地下室に男が…そう言っていたんだよな老婆は。

「やはり僕達は何者かによって記憶を消され、ここに監禁されたのでしょうか…」

男はアゴを手でさわりながら「ウーン…」と考えている。

俺は何もわからない。

すると男は自分の部屋に戻って行った。俺はソレを見逃さない。

何号室か確認しようと思いい目で追って行ったが、男はトイレに入ってしまった。

まあいいかと思いい俺も自分の部屋に戻ったのだが、…思えばこの時

にしっかり部屋を確認しとくべきだった。

俺が部屋で寝転んでゴロゴロしていると、部屋にまた九号室の青年がきた。

青年はノックもする事なく、高い背をフラフラとさせながら勝手に入ってきた。

「ああ… 六号室の人よ… ボクは何をしているのだろうね…。」
そんな事、突然言われてもわからない。

「ああ… 銀色のオツキサマが恋しいよ…。」

そして青年は急に目つきが変わり、目をカッと見開いて怒鳴り始めた。

「だから言っただろ！ この世はコンナ物なんだよ！」

いきなり何を言うかと思つて驚いていると、青年は落ち込んだ顔で俺を見た。

「平等なんてさあ… 嘘だよ…。 ボクはナア… 神様に言っただん…。」

「何を。」

「この世界から出せと言っただん…。」

「それで？」と質問した俺に青年はまた怒鳴った。

「アイツはボクの言う事を無視しやがった！ だからボクは…。」

青年はそれだけ言つて、ドアを蹴り開けて俺の部屋を出て行った。

九号室の青年は確かに不気味で怖い。

その暗くて薄い、裏がありそうなニヤけた目を見ていると、とても不安にさせられる。

一緒にいるだけで身体を蝕まれそうなほど、悪の色に染まった青年だ。

でも何か… 違う…。

本当に怖いとは言えない。

心の底から震え上がり、死を覚悟するほどの恐怖は感じた事がない。それに最初は確かに悪魔の化身のようにも見えたのだが、今となつては普通にさえ見えてきた。

そんな事を思えるようになった自分は、やはりアノ青年に心を蝕ま

れたのか。

正常という一定の線を狂わされたのだろうか。

いや、そもそも、正常って何だ。

あの青年からすれば、自分が普通だと思っている。

しかし俺から見ればアノ青年はオカシイ。

でも逆に考えて、もしもアノ青年みたいなヤツがたくさんいて、その中に俺が一人いれば、俺が変に見えてしまう。

青年は「自分だけが正常」と言っていた。

…なるほどね。

世界は平等では無い…その意味がわかった気がした。

俺は頭を休めようと思い、倒れるようにゴロンと地べたに寝転んだ。地面に頭をブツけて痛かったが。

そして…しばらく時間が経過した…。

ゴンゴンゴン…。

ん…誰だ…。またアイツか…。

ゴンゴンゴン…。

いや、アイツは勝手に入ってくる。

ゴンゴンゴン…。

俺は立ち上がり、ドアを開けた。

「どうもです。」と言って細い目の男が片手にゴハンを持ってやってきた。

あの、老婆の時にいた男だ。

「あの、どうしたんですか？」俺が問う。

「ちよっと今日、食欲が無いもので…。このゴハン捨てるのも勿体ないし、いりませんか？」

そう言って男は片手に持ったゴハンを俺に差し出した。

ちよっと俺は少し腹が減っていたので、素直に「ありがとう」と言っ

て受け取った。

「どうぞ、入って下さい。」

俺は男を部屋に入れた。

座って白飯と漬物をバクバクと食べる俺の正面に、男は正座している。

「こないだのお婆さんは、お気の毒でした。突然死んじやったから驚いたよ。」

深刻そうな顔で男は話す。

「僕も、こんな場所で暮らすのに疲れてしまいましたよ。」

俺はゴハンに夢中になっているため「そうですかぁ」と適当な返事をした。

「はい。なんていうか、死んでいく人達が羨ましく思えてきたというか…。」

ゴハンを食うのを止めて、俺は答えた。

「いや、死んだら何もかも終わりですから。もしかするとあと数時間後に出られるチャンスがくるかもしれません。」

「そうかなあ。僕は一生ここから出られないと思うんですけどね。」俺は黙って、再びゴハンを食べ始めた。

「あの、もう…。」

ここで俺は嫌な予感がしたので、男の会話を無理矢理止めようと、部屋番号を聞いた。

「すいません、あなたは何号室なんですか？」

「僕は…九号室です。」

思わずゴハンを噴出してしまった。

九号室って…あの危ない青年じゃなかったのか。

すると…この男が…。

頭の中が真っ白になり、呆然と箸を止めて固まる俺を見て、男は言った。

「どうしたんですか？部屋番号聞いて、何か九の数字に嫌な思い出でもあったのですか？」

嫌な思い出も何も…。

俺の頭の中にアノ女のセリフが響き渡った。

「九号室の人には注意した方が良いでしょう。九号室の人は…何か変

なんです。」

何か変だと言うから、俺は勝手にアノ青年が九号室の住人だと思い込んでいた。

今、俺の目の前にいるコノ男が、アノ青年よりもオカシイ人物だと言うのか。」

俺は鳥肌が立った。

俺の視界に現在も入り続けているコノ男が、アノ青年よりも変な人には全く見えない。

もしや…女が部屋番号を間違えたのか。

黙って色々と考えている俺の頭の中は真っ白だった。

その真っ白なキャンバスに赤い絵の具をベチャッとブチ撒いたように、男の声が耳に入ってきた。

「どうしたんですか？」

俺はビクツとした。

なんとか、この場を終わらせなければ…。

俺は白飯と漬物を一気に口の中に押し込んだ。

緊張感に耐えられなくなった胃は、ソレを拒否する。

しかし俺は関係あるまいと死ぬ気で口の中に押し込んだ。

早く食べ終えて、コイツに早くコレ持って帰ってもらおう。

そして、やっと食器を空にする事ができた。

さあ、早くコレを持って部屋に帰ってくれ…。そう心の中で叫んだ。だが男はカラッポになった食器を手取る事もなく、まだ正座したまま目の前に座っている。

まるで山で熊に出会って、そのまま動けずに熊とニラメッコしているような感じだ。

早くドコかに行ってくれよ…。

そんな口にさえ出していない俺の言葉が伝わるワケもなく、男は話し始めた。

「あの、もう、僕らはココにいても仕方ないですよね。」

この男が危険だと知ってから、この男の言葉全てが恐ろしく聞こえ

てしまう。

「僕らは、一生ココで苦しんで死んでいくのです。」

俺は黙って聞いていた。

変に喋って男を挑発すれば、それこそ最悪だ。

手の中が汗まみれになっている。

「一生ココで辛い生活するなら、もう諦めて天国へ行…」と言いかけたところで俺は立ち上がり、部屋から出ようとした。

ドアに向かって一直線に走り、俺はドアノブを掴んだ。

そのままドアノブを握り体重をかけて開こうとしてる間に、俺は男に腕を掴まれ部屋の中央に投げ飛ばされた。

ドスン…。痛てて…。

俺は男の方を見上げた。

男は俺を見下ろし、言った。

「何故、逃げるのですか？生きていても楽しい事なんてありませんよ？」

俺は男の目を見たまま顔を横に振った。

「やめろ…。」

男は「もう何しても無駄ですよ…」と言いながら俺の上にのしかかって首を締め始めた。

苦しい…。

首のノドボトケの辺りが男の親指でグイグイと押し潰されていく。そして視界がキラキラと輝き、フラッと意識が遠退いた。

頭の中が真っ白になって、力がヒュンと抜けた。

「ああ、ここで死ぬのか。」と無意識に呟いた俺は、ドアがガチャンと開く音を聞いた。

次に俺の頭はコンクリートの地面に落下してゴツンと鈍い音をたてた。すごく痛い。

俺は戻ったばかりの意識を、なんとか使いこなして男の方を見た。あれ、二人いる…。

一人は俺を殺そうとした男。その男の首を後ろから腕でガッチリ掴

んでいる男がいる。

目がボヤケてよく見えない…。

俺は目をコスリ視界を定めてよく見た。

そこには、すっかり見慣れた姿があった。

初めて会った時の印象は「悪魔のような男」だった。

しかし今の俺には、アノ青年が神のようにも思える。

頭のオカシイ青年が、男と掴み合いをしている。

「ボクの友達：アツチに送ったらダメだ。」そう言いながら青年は男の首を絞め続ける。

俺はとりあえず壁際で見ている事しかできなかった。震えて足腰が動かない。

青年は本気で首を絞めているようで、男の顔がだんだん青白く変色しているように見えた。

ここで男は真剣にキレたのか、青年の腕を振り払い、距離をとってから顔を思い切り殴った。

青年はブツ飛んで、ドアにガシャーンと衝突した。

次に青年はドアにぶつかった反動を利用して、男の懷に飛び込み、ドコドコとボディへのラッシュが始まった。

そこでドアがガチャンと開いた。

「ちよつと、なんの騒ぎですか!？」

部屋に入ってきたのは一号室の男だった。

一号室の男はタルンタルンになったグレーのシャツを正して、溜息をついた。

「はあ、仕方ありませんね。」

一号室の男は困った顔をしたまま、九号室の男と青年を一瞬で引き剥がし、九号室の男を投げ飛ばした。

見るからに弱そうな一号室の男の、どこにそんな力があるのかと疑問に思ったが、とりあえず助かった。

青年は落ち着いたのか、静かに投げられた男を黙って見ている。

一号室の男は倒れた九号室の男に近づいて、「あなたは強制退場で

す。」と言って首を絞めて殺した。

そして一号室の男は九号室の男の死体を担ぎ、俺に頭を軽く下げて、部屋から出て行った。

ガチャン…。

扉は閉まり、再び静寂がこの部屋を訪れた。

ふう…と溜息をつき、部屋の中にまだ青年がいる事に気付いた。

俺は助けてもらった礼を言おうと思った。

「ありがとう。」

青年は返事をした。

「ハハハ…アハハハ…ハハハ…ハハハ…。君はいつも楽しそうだったよね…アハハ…。」

青年はタダタダ笑いながら頭を抱えるだけだったが、きっと伝わただろう。

ガチャン…。

またもや誰か部屋に入ってきた。

「あの、大丈夫ですか？」

ドアの影から部屋の中を覗くのは、七号室の女だった。

「ああ、ちよつと九号室の人に殺されかけた…。」

そう答えた俺に、女は呆れた顔をして言った。

「だから気をつけてって言ったじゃないですか。」

「ごめんなさい。」

そして青年はフラフラと部屋に戻って行った。

今、部屋の中には俺と女だけ。

女は地べたに座って、薄く微笑みながら口を開いた。

「あの人は四号室の方ですね。仲良かったんですか。」

あの青年、四号室の人だったのか。

「四号室の方は少し変わってるけど、とても良い人ですよ。」

全く、俺はアノ青年を勘違いをしていた。

仕草や言動だけでオカシイヤツと決め付けていた俺は、結局ソレが原因で殺されかけた。

まさかあんな普通の男が九号室のヤツだったなんて。

「人は内面を見て判断するのがいいですよ。」と女は優しく微笑みながら言った。

「そうだな。」

そして女は部屋に戻って行った。

ガチャリと。

俺は疲れたから寝ようかと思っていた。

今日は色々な事があった。今日と言うのはオカシイかもしれないが、俺からすればコレが今日だ。

俺は自分だけの今日に「おやすみ」と言って眠りについた。

…。

この世界での暮らしの中、違和感を一番感じるのが寝て起きた時である。

やはり時計も太陽も月も無ければ、時間の感覚が麻痺して気分が悪くなる。

「もうこんな時間か」というセリフが除外された世界。

俺が「何時間ぐらい寝たのだろう」と思いながら目覚めると、何やら外が慌しかった。

何があったのかと部屋から外に出てみると、女が呆然と廊下に立っていた。

「あの、何かあったんですか？」俺は聞いた。

「さっき、四号室の方が亡くなっていたそうです。」

俺は四号室と言われてもすぐにピンとこなかった。

それは寝起きであつたためか、それとも四号室と知ったばかりだったからか。

わからないが俺はとにかく扉が開きっぱなしの四号室の中に入った。そこには見慣れた青年と一号室の男がいた。

一号室の男は倒れている青年の横で正座をして、手を合わせて目を閉じて頭を下げた。

「そんな馬鹿な…。」

何が起ったのか理解できていない俺を見つけた一号室の男がコッ
チに歩いてきた。

「この人が死ぬ前、あなたは一緒にいましたよね。」

「はい。」俺は答えた。

「この人、何か言っただけでなかったでしょうか？記憶が戻ったとか。」

「え、いや、わかりません。」

記憶が戻ったとは、どういうことなのか。

死ぬ前に記憶が戻るのか？と考えて俺は老婆を思い出した。

あの老婆は死ぬ前に「記憶が蘇っていく」と言っていた。

記憶が戻れば死ぬのか？

それじゃあ…記憶を戻すことができないじゃないか。

俺は困った。

…。

そして、それから何も無い日々は続いた。

何も思い出せぬまま。

アノ頃と何一つ変わらない暗くて冷たい日々を送っていた。

さあ、どれほどの月日が経過したのだろうか。

俺はいつものように地べたに寝そべって七号室の女と会話をしていた。

「この部屋から出る事ができたら何をしようかな。」女は言う。

「俺はとりあえず風呂に入りたい。」

「それは同感。ここに閉じ込められてから入ってないし。」

「もう我慢の限界だな。」その言葉が部屋に響き渡った。

一瞬の静寂があり、それを切り裂いて割り込んできた音は、とても
不思議な感覚を生み出した。

声と物音しか音が無いコノ空間に、聞き慣れない音が入り込んだ。

ビー…ビー…ビー…。

サイレンというのか、警告音といのか、耳障りな音がコノ世界を暴
れまわる。

「何だ。この音は。」

「わからない。私も始めて聞く。」

しばらくビービーと鳴り響いていたが、やがて音は静かに消えていった。

そして次にアナウンス、放送のような声が世界に響く。

「全ては終了しました。繰り返します…。」

俺と女は固まった。

一瞬のうちに思考回路がグルグルと回転して、一回りして同じ場所に帰ってきた。

そして再び俺の耳にアナウンスの声が入り込んで、我に返った。

「全ては終了しました。」

最後のその一言を合図に、ガチャガチャガチャと全ての扉が自動で開いた。

それから一号室の男が廊下で大声を出し始めた。

「皆さんコチラです。一号室へお集まり下さい。」

俺は現在自分が置かれている状況を把握しようと頑張ったが、何一つとして理解できなかった。

女は俺の手を持って言った。

「一号室にこいだって。」

俺は意味もわからず、ただ手を引かれるまま歩き、気付けば一号室にいた。

一号室には、三人の人達がいた。

一号室の男、三号室の男、十号室の女。

それに加えて俺と女で、合計五人。

みんな一号室に集まった。

「状況が理解できていないのは俺だけじゃなかった。」

その俺は後に女と繋がる事になる。

それは全て運命ということだ。

でも実は全部繋がっているんだ。

吾輩とな。

*

吾輩の記憶は、ちよつとゴチャゴチャとしていた。

許してほしい。

しかし、これこそが見たまんまの眞実。

夢は現実の世界にあるのだから、まあそのまんまだと吾輩は思う。

吾輩この記憶を持つているのが本来オカシイのかもしれないな。

吾輩はホタテを食べながら、また観光に行くことにするよ。

また誘拐されるかもしれないな。

ここで重要なのは何故こんな事になったのかではない。

これも吾輩の自分探しの一つなのだ。

そもそも理由なんて吾輩も知らない。知れなかったんだ。

*

十月のライブからしばらく経った十一月のある日の早朝。

今日は生まれて始めてバイトというものを経験する。まあバイトと言つても一日限り、給料は日払いで小遣い稼ぎ程度のものだ。

吾輩は朝五時頃から家を出て、バイトの現場へと向かう。電車の中でマルコベイリーのリキッドラボを聴きながら外の景色を眺めていた。

吾輩は誰なんだ。

そして夕方の五時頃になり、吾輩は相棒のダンゴムシが入った小瓶を片手に持ち帰りの電車に乗った。十一月ともなると、さすがに肌寒い。しかし、またしばらく待てば春がやってくる。春がやってくるのだ。

吾輩は春が好きだ。好きだからこそ去っていく頃に切なさを感じる。しかし春はまたやってくる。ミニマルミュージックのように繰り返す日々や日常、その中で小さな幸せを見つけた時、この幸せがいつまで続くのだろうかと思ってしまう。

吾輩は、これまた生まれて初めての給料を見て、これを小さな幸せと置き換えた。

それから吾輩は家に帰宅する途中、デパートに寄り新しい歯ブラシを購入した。

夜通し歯を磨いて、新しい歯ブラシをボロボロにした。
もうすぐ夜が明ける。

吾輩だけの空が、ホラ、見えてきた。

一生とは、こんな感じなんだな。

ドンッ。

（後書き）

俺的の視点で見た世界構成、頑張りました。でも理解されにくい表現の仕方かもしれない。次はもっと頑張らなければ。やっぱり難しいナア。汗

さて、読んでくれた人には素直にお礼を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6343b/>

吾輩の空

2010年10月20日10時20分発行